

A Tale of Two Cities

——パリとその表象——

吉 田 一 穂

序

A Tale of Two Cities (1859) は、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) が1859年4月に *All the Year Round* を創刊するに当たって連載を始めた歴史小説であり、リチャード・ウォーダー (Richard Wardour) の役を演じて以来、彼の心を去らなかつた熱い情熱の全てを、フランス革命の恐怖を背景に力強く表現したものだ。この小説は、大好評をもって迎えられた。1859年の6月には、ディケンズは *All the Year Round* が「驚くべき成功」だと報告することができた。通常の数部が平均19万部、クリスマス号は30万部と売れ行きは、*Household Words* をはるかにしのいでいた。

A Tale of Two Cities は、二つの都市、すなわち、パリとロンドンの物語である。とりわけ、アンガス・ウィルソン (Angus Wilson) が述べているように、「パリにおいて、恐怖という形で吹きまくった残酷な旋風の物語」である (Wilson 267)。フランスとイングランドの双方が描写されているこの物語に関し、シルヴェル・モノ (Sylvère Monod) は、「*A Tale of Two Cities* の作品全体としてフランスとイングランドの間のバランスが見

キーワード：パリ，民衆，カーニバル，ロンドン，再生

られる」と指摘しているだけでなく、「イングランドの全ての章が第1巻と第2巻にある一方、フランスの大部分の章は、第3巻全体を作り上げている。それゆえ、*A Tale of Two Cities* は二つの都市を密接に結びつけているとは言い難い」、さらに「作品は、単に英仏に生きる家族、最初イングランドに生活し、後にフランスに生活する家族の物語を語っているにすぎない」と述べてる (Monod 466)。

モノの見解は、*A Tale of Two Cities* で二つの都市が描写されていることの意味を限定してしまう見解である。しかし、パリとロンドンはそれぞれの社会情勢の中で生きる群集や個人を考える場合、類似点、相違点、対比などの観点から密接に結びついていないとは言い切れない。ただ、ディケンズがフランス革命を中心に物語を描いているせいか、パリを中心に物語が展開していく印象を読者は持つ。本論文では、パリを中心に物語を考察し、パリが表しているものについて述べてみたい。

1. 民衆とパリ

ディケンズは、第1巻第1章で *A Tale of Two Cities* の背景となっている時代について、「希望の春でもあれば、絶望の冬でもあった」(1) と述べているだけでなく¹⁾、「全てはあまりにも現代に似ていた」(1) と表現している。ディケンズは、ヨーロッパじゅうで政治的不満が高まりつつあるとき、社会における無政府主義状態を恐れていた。イギリスでは1830年代チャーチスト運動が民主化推進の中、集会や請願を行ったりしていた。パリでは10年後暴徒が通りを埋めつくしていた²⁾。ブライアン・マレー (Brian Murray) は、こういった恐怖が *A Tale of Two Cities* において、ギロチンや悪名高いゴロゴロと音を立てる死の馬車によってとてもはっきりと伝えられていることを指摘している (Murray 26)。ディケンズは、自身の生きる時代と作品の背景を重ね合わせて考えているように思われる。

A Tale of Two Cities

ただ *A Tale of Two Cities* の時代の特徴は、民衆が力を持つようになった時代で、その様子を彼は描き出している。

18世紀後半になって、アメリカ独立革命、フランス革命、そして産業革命が勃発し、主権は神聖であり、上流階級が永遠に社会の頂点に君臨し続けるという考えは疑われ始めた (Frye 99)。フランス革命に関しては、1789年の革命は、経済的危機という背景の中で生まれた。18世紀は繁栄の時代であったが、それが頂点に達したのが1750年末から60年初めにかけてのいわゆる<ルイ15世の栄華>の時期で、1778年には<ルイ16世の凋落>が始まる。こうして収縮期、後退期に入る。その仕上げをしたのが1787年に起きた飢饉である (ソブール 366)。その前にも1770年、1772年、1774年に不作があり、1774年5月3日パリでは騒乱が起こった。パン屋が襲われ、市場のパンが強奪された。騒乱は、3日後に再発し、200袋の穀物が群集によって奪い去られ、パン屋や個人の家が襲撃された³⁾。

ディケンズは、第1巻第5章において、パリのバスティーユ (Bastille) 監獄とセーヌ河にはさまれた貧民街であるサン・タントワヌ (Saint Antoine) で民衆が飢えている状態を示している。この章の冒頭で大きな酒樽が車から道路に落ちて壊れ、近くに居合せた人たちが駆け寄ってこぼれた酒を飲み始める様が描かれている。ディケンズは、次のように赤ぶどう酒に群がる民衆を描写している。

The wine was red wine, and had stained the ground of the narrow street in the suburb of Saint Antoine, in Paris, where it was spilled. It had stained many hands, too, and many faces, and many naked feet, and many wooden shoes. The hands of the man who sawed the wood, left red marks on the billets; and the forehead of the woman who nursed her baby, was stained with the stain of the old rag she wound about her

head again. Those who had been greedy with the staves of the cask, had acquired a tigerish smear about the mouth; and one tall joker so besmirched, his head more out of a long squalid bag of a night-cap than in it, scrawled upon a wall with his finger dipped in muddy wine-lees —BLOOD.

The time was to come, when that wine too would be spilled on the street-stones, and when the stain of it would be red upon many there.
(28)

酒は赤ぶどう酒であった。そしてそれがこぼれて、ときならぬ紅を染めたのは、パリ、サン・タントワーヌであった。それは多くの人の手を染め、顔を染め、素足を染め、木靴を染めた。薪を挽いていた男の手は、その薪片に赤い痕を残し、赤ん坊の守りをしていた女の前額は、再び頭に巻いたボロきれによって赤く染められた。樽の破片をガツガツかじっていた男たちは、口のまわりを、まるでとらの縞模様のように染め出していた。中でも、この最後の仲間の一人だが、薄汚い、まるで長い袋のようなナイトキャップを、かぶるというよりは、むしろその中から突き出しているといったほうがいいような、ひどく背の高いひょうきん者が、いきなり泥まじりの酒おりに指を浸したかを見ると、大きく壁に「血」と書いた。

そして血というそのぶどう酒もまたこの街に流され、それによって多くの市民たちが真っ赤に染められる日が、やがて来るのであった。

この箇所では気づかざるを得ないことは、ディケンズが赤ぶどう酒と血を関連づけていることである。そしてこの血は、次の「飢え」に関する描写により、怒り狂った民衆がその「飢え」が原因で立ち上がり血を流すこと

A Tale of Two Cities

を暗示している。

一方で、ディケンズは、第2巻第7章でパリにおける貴族を描写している。パリの宏壮な邸館にいる侯爵は、チョコレートを一杯飲むのに4人の男を必要とするほどの贅沢をし、全フランスの窮乏より喜劇や歌劇の方を好むような享樂好きな貴族である。彼の考えでは、「全ては彼自身の財庫を太らせるため」(99)にあらなければならない、「世界は彼の快樂のためにある」(99)のである。ディケンズは、彼の理法の主題を「大公のたまいけるは、地とそれに満ちている物とは、わがものなり」(99)であると説明している。これは、新約聖書のコリント人への第一の手紙第10章第26節の「地とそれに満ちている物とは、主のものである」(Corinthians I 10: 26)を変えたものであり、いかに侯爵が不遜であることを示している。

見落としてはならないことは、この箇所の前のコリント人への第一の手紙第10章第16節には「私たちが祝福する祝福の杯、それはキリストの血にあずかることではないか」(Corinthians I 10: 16)とイエス＝キリストを賛美するような言葉が、また第10章第24節には「誰でも、自分の益を求めないで、他の人の益を求めるべきである」(Corinthians I 10: 24)と人間の理想的な生き方が述べられていることである。自身を神のように考えている侯爵は、共同噴水栓のある街角で、自身の馬車が子供をひき殺してしまっても平然としているだけでなく、金貨が馬車の中に飛び込んできたとき、民衆に向かって「なんならきさまたち、一人残らず踏み殺して、この世から根絶やしにしてやってもいいのだが」(105)と言う。このことから、彼が聖書の言葉の正反対を行う人物であることは明らかである。彼の馬車が村の丘にさしかかったとき、丘の一番険しくなったところに、小さな墓地があり、十字架と建てたばかりの大きなキリスト像が立っている。このキリスト像の前に一人の女性がひざまずいている。彼女は、侯爵の前に進み出て、貧困が原因で夫が死んでしまったことを訴えるが、侯爵は、「生

き返らせることなど、余にできようか？」(110) と言う。このことは、自身の益のみを考える貴族が無力であることを示している。

このような貴族たちを支える旧体制に対する民衆の不満がパリで爆発する様をディケンズは描き出している。彼は、サン・タントワヌの群集が武器を持ったときの様子を「サン・タントワヌじゅうの鼓動と脈拍が、いわば熱病のような緊張と熱狂に震えていた」(204)、また「ここにいる全ての人間は、もはや生命など物の数ではなく、そんなものは、いつでも犠牲にしていというような、いわば気違いじみた興奮に沸き立っていたのだった」(204) と描写している。ハリー・ストーン (Harry Stone) は、「*A Tale of Two Cities* のカニバリズムによってディケンズは、歴史の根底的な流れ、原因と結果の不可避性、ぞっとするような罪と復讐の帳尻合わせを表現している」と指摘しているだけでなく (Stone 162)、「ディケンズは、栄養状態のよいフランス貴族を飢えたフランスの民衆を殺し、むさぼり食う存在として見ている。ディケンズは、がまんできないほど搾取された飢えた民衆を貴族を殺しむさぼり食う存在と見ている」と述べている (Stone 164)。*A Tale of Two Cities* においてディケンズは、カニバリズムをカーニバル的イメージと関連づけることによって描写を効果的にしている。

カーニバルに影響を及ぼしたもっとも時代の新しい祭に、中世まで行われていた愚者祭がある。12月の終わりに催されたこの祭は社会的秩序を逆転させる催しで、司祭でない者が司祭に扮し、祝福ではなく冒瀆の言葉を信徒たちに授けた。教会は中世になってこの罰当たりな祭を非難するようになったが、古来催されてきたこの宗教的な祭典は、キリスト教の祭典にしだいに統合されていった。伝統的に、カーニバルは四旬節の直前の数日間に開催される。カーニバルという呼称は十世紀のローマ・カトリック教会の文献に記されたラテン語の言葉に由来する。その言葉にはこの祝祭の

A Tale of Two Cities

キリスト教における役割が示されている。すなわち肉を意味する“carne”と、取り上げること、あるいは取り除くことを意味する“levare”である。キリスト教では復活祭前の四旬節の40日間に断食し、禁欲することになっていたもので、その直前のカーニバルは肉などのぜいたくな食材を使い切る最後のチャンスだった。四旬節に宴会を開くことは禁じられていたので、その第一日目である灰の水曜日の直前の数日間に、カーニバル発祥の地イタリアを始めとするカトリック国で、祝宴が盛大に催されるようになった(Smith 125-26)。

ディケンズの描く民衆には、カーニバルの沸騰するような勢いと力強さを感じられる。ディケンズは、パリという都市で飢えていた民衆が大海のようになりバスティーユに殺到する様を描いている。7月14日のバスティーユ占領は、革命権力としての市民権力の成立であり、その勝利であった⁴⁾。イギリス人医師エドワード・リグビー (Edward Rigby) は、バスティーユ襲撃に偶然居合わせた人物である。彼は、サン・トノレ通り (Rue Saint Honoré) 通りの端で大群衆がパレ・ロワイヤル (Palais-Royal) へ向かって行進しているのを見、彼らの頭上の竿に取りつけられた「バスティーユは占領され、開門された」と書かれた紙を見る。そして、人々の歓喜の表現を目撃する。彼は、「私たちは喜んで群衆の声に合わせて自由を叫んだ」(1789年8月11日)と家族あての手紙に書いている(リグビー 82-83)。一方で、ディケンズが第2巻第21章の最後で次のように書いていることに注意しなければならない。

Now, Heaven defeat the fancy of Lucy Darnay, and keep these feet far out of her life! For, they are headlong, mad, and dangerous; and in the years so long after the breaking of the cask at Defarge's wine-shop door, they are not easily purified when once stained red. (210)

ああ、神よ、願わくばあのルーシー・ダーニーの空想を破り給え！これらの足音の、彼女の生活にゆめ近づくことなからしめ給え。なんとなれば、それは物に狂った危険きわまるもの。あのドファルジュの酒店で戸口で酒樽が壊れて以来、すでに幾年かの歳月はたっているが、一度血の色に染められた足は、容易なことでは清められるものではないからである。

ここでは、ドファルジュの酒店の戸口で壊れて流れ出た赤ぶどう酒が革命で流される血と関連づけられている。飢餓感からくる旧体制に対する復讐が明確に現れるのがフーロン (Foulon, 1715-89) の描写である。フーロンは財務監督官長でルイ16世の重臣であったが、1789年7月22日、72歳で虐殺された。*A Tale of Two Cities* におけるフーロン処刑の描写は、フーロンがかつて民衆が食べ物がなく飢餓に瀕していると言われたとき、嘲笑って「民衆などは草でも食べていればいい」と言ったことに対し、民衆がその不人情の言葉を怒り、彼を捕えるや、彼に復讐し、死んだ後も口に草を詰め込んだという歴史のできごとに基づいている。トマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) は、*The French Revolution* (1837) においてフーロンについて「民衆に草を食べさせようとし、最初から嘘つきであった陰謀家」(215)⁵⁾、「彼の体は、通りを引きずり回され、彼の頭は口に草を詰め込まれた状態で、やりの上に高々と持ち上げられた」(216) と描写する一方で、民衆の状態を「草を食う民衆の復讐はかくの如く惨憺たるものであった」(216) と述べている⁶⁾。一方ディケンズは、*A Tale of Two Cities* において、「食い物がなければ、草を食えと言ったあのフーロンだと！」(216)、「わたしたちにフーロンの血をくれ！」(213) と言って怒り狂っている女たちを描写している⁷⁾。さらにフーロンに復讐した民衆の様子を、「彼の首は矛高く貫かれ、口はいっぱい草が詰められて、サン・タ

A Tale of Two Cities

ントワーヌの連中は、みんなそれを見ながら、ただ喜びに踊り狂っていた」(214)と描写している。このことから、フーロンに関するカーライルとディケンズの描写はよく似ていると言える。両者の描き出すパリは、抑圧されてきた民衆が本能的になった場所としての意味を持つ。

さらにクックシャット (A. O. J. Cockshut) がパリの群集を「容赦ない理想により生み出された押えられない社会的力である」と表現しているように (Cockshut 71), ディケンズは急速に民衆が力を持つ様をも描き出している。ウィル・ボショア (Will Boshor) は、「ルイ16世 (Louis XVI, 1754-93) は、時代の変化と国民の意志が持つ勢いについての判断を誤った」と述べているが (バショア 170), おそらくルイ16世にとって時代の変化も民衆の勢いも想像を越えるものであったにちがいない。まもなくさまざまな権利, 爵位, 大権, 特権が廃止され, ついには, 王は裁判にかけられ, 死刑の宣告を受け, 首をはねられる。その後もギロチンは, 多くの首を斬り落とす。注意しなければならないことは, ディケンズがギロチンについて「いわばそれは, 人類再生の標識だった。完全に十字架に取って代った, 小さなその模型が, 人々の胸に飾られ, 十字架の方はむしろ取られてしまっていた」(260)と説明していることから, 民衆が無慈悲になっている様子を伝えていることだ。

このような集団心理は, パリだけでなくロンドンでも見られる。スーザン・クック (Susan Cook) は、「ロンドンに歴史的に注目されていず, 民衆の平和な時代であり, パリは, たぐいまれな革命の時代である」と指摘しているが (Cook 248), ディケンズは, ロンドンにおいても民衆の心理が必ずしも平和でないことを示している。第1巻第1章ではロンドンの中央刑事裁判所, オールド・ベイリー (Old Bailey) での反逆罪を問う裁判が描かれている。この裁判でチャールズ・ダーニー (Charles Darnay) は, イギリスの国王がカナダおよび北アメリカに送る予備戦力の機密をフラン

ス国王ルイに漏洩したという嫌疑をかけられている。この場でダーニーは民衆の見世物になっている。ディケンズは、民衆の興味の根元を「食人鬼のそれ」(59)と表現している。さらに被告が、そこにいる全ての人たちによって、「心の中ではすでに絞首刑にされ、斬首され、四つ裂きにされている」(59)様子を伝えている。このことから、パリだけでなく平和に見えるロンドンでも民衆の深層心理における無慈悲さが描かれていると言えるが、パリにおいては革命によって正当化された民衆の無慈悲さが顕現化された様子がうかがえる。一方でディケンズは、革命の動乱に巻き込まれる個人をも描き出している。

次に *A Tale of Two Cities* において難しい状況におかれるアレクサンドル・マネット (Alexander Manette) 医師に目を向けてみたい。

2. マネット医師とパリ

A Tale of Two Cities においてマネット医師ほど自分を取り巻く状況に翻弄される人物はいない。最初マネット医師は、王党派の監獄、北塔105号から解放され、ドファルジュ (Defarge) の家で生活している。クックシャットがマネット医師の状況について説明しているように、マネット医師は自由であるが、彼の自由は彼にとって何も意味しない。彼はいつも一人であり、ほとんど訪問客がないからである (Cockshut 32-33)。

マネット医師は、フランスのボーヴェー (Beauvais) の医師であったが、セン・テブレモンド (St. Evrémonde) 侯爵兄弟の秘密 (凌辱) を知ったためバスティーユの獄に18年間幽閉されていた。マネット医師は、バスティーユを出た後、昔召使이었다が現在はパリの酒場の主人となったドファルジュの世話になる。マネット医師は、監禁状態と粗食のため衰弱しているだけでなく、希望も何もかも失い果てた人間のようになって屋根裏部屋に閉じこもって靴づくりをしている。そこへ娘のルーシー (Lucie) が

A Tale of Two Cities

訪ねてくる⁸⁾。ルーシーは、自身の身元を知らせるため長い女性の金髪を彼に示す。それを見てマネット医師は、自身がかつて言った「何も脱獄の道具になるほどのもんじゃない。いや、心の脱獄はさせてくれるかもしれないがね」(43)という言葉を出す。ここでディケンズが第1巻第3章の冒頭で次のように書いているのを思い起こしておきたい。

A WONDERFUL fact to reflect upon, that every human creature is constituted to be that profound secret and mystery to every other. A solemn consideration, when I enter a great city by night, that every one of those darkly clustered houses encloses its own secret; that every room in every one of them encloses its own secret; that every beating heart in the hundreds of thousands of breasts there, is, in some of its imaginings, a secret to the heart nearest it! (10)

人間という人間が、みなそれぞれがお互いに対して、そんなにも深い神秘であり、秘密であるようにできていることは、考えてみれば実に驚くべきことである。たとえば、夜、大きな都会に歩み入るとき、その真っ黒な闇の中にひしめき合っている家々一つ一つの家、一つ一つの部屋が、これまた自分だけの秘密を秘めている。しかもそこに住む何十万という人の胸に脈打つ一つ一つの心が、これまたその中に描き出す思いの像については、最も近いものにさえ測り知れぬ秘密だということ—考えてみれば実に恐ろしいことではあるまいか。

この箇所ディケンズは、人間の心の神秘や秘密について述べている。それだけでなく、「一つ一つの心が、その中に描き出す思いの像については、最も近い者にさえ測り知れぬ秘密である」と述べていることは、マ

ネット医師の心理状態の変化を描き出す際に効果的に働いている。

パリで長く監禁状態に置かれていたマネット医師は、娘との再会で絶望的な状態から<生>への希望を見出す。このことから、パリはマネット医師が精神的死の状態から生への状態へ移動する場所と言える。一方でパリは、最初旧体制が残っている状態でマネット医師にとって心の平安を得られる場所ではない。ルーシーは、彼に「これからイギリスへ行って二人で楽しく平和に暮しましょうね」(44)と言う。また、「お父さまは旅行などおできになれますか」(45)と尋ねるローリー(Lorry)にルーシーは、「父にとっては、こんな恐ろしいパリにいるよりは、まだそのほうがいいと思いますわ」(45)と言う。嫌な記憶のあるパリを離れ居をロンドンに移すことにしたマネット医師は、ソーホー(Soho)広場から遠くない、静かな通りの閑静な一角に落ち着く。ここに落ち着いてからの彼は、精力を回復し、剛毅な意志と、強力な決断と、旺盛な行動力の持ち主となる。今や彼は、ルーシーに語るかつての錯覚、すなわち、「娘が、ふと独房を訪ねてきて、はるか牢獄の外の自由な世界へ、私を連れ出してくれるような気がしたのだ」(180)という錯覚ではあるが理想的な状態が実現し、平穏な家庭を手に入れた状態となる。しかし、過去の監禁状態の記憶が全く消え去ったわけではない。ルーシーがダーニーと結婚した後、ある男に起きる発作についてローリーに所見を求められたマネット医師は、「昔何かその病気の原因になった思い出、記憶があって、それがまた異常な強烈さでよみがえったというのだろうね」(192)と言う。この症状は、実は、マネット医師自身の症状である。彼は、フラッシュバックに直面している。マネット医師は、再びパリにおける過去と監禁状態へ追いやられるのではないかと恐れているのだ。このようなマネット医師の心理は、娘のルーシーが遠くへ行ってしまうのではないかという不安とも関連している。

ところでディケンズが、娘に対する父親の心理を *Doctor Marigold*

A Tale of Two Cities

(1865)でも描き出していることに注目したい⁹⁾。彼は、この作品を1866年の公開朗読で披露して、イギリスだけでなくアメリカでも絶賛された。この作品で、マリゴールドは、娘のソフィ (Sophy) の死に直面するが、娘の代わりに耳も口も不自由な子供を養女とし、「ソフィ」と名付ける¹⁰⁾。ソフィは成長し、同じように耳と口が不自由な青年ピックルソン (Pickleson) と結ばれて幸福な家庭を作る。ディケンズは、父親と娘の愛情の絆を *Doctor Marigold* でも *A Tale of Two Cities* でも描き出しているが、*Doctor Marigold* ではピックルソンが父親の商売を引き継いで事務員として中国へ行き、ソフィが同行するがゆえに離ればなれとなる一方、*A Tale of Two Cities* では、革命が父親と娘の間に立ちふさがるので、不可抗力のようなものをディケンズは描き出そうとしている。

マネット医師の平穏な家庭への願望は、娘の夫であるチャールズ・ダーニーがギャベール (Gabelle) 救出のためパリに行き、捕えられてしまうことによって途絶えてしまう。マネット医師は、今度はダーニー救出のためパリに行かなければならなくなる。ただ注意しなければならないことは、パリは彼にとって以前の監禁状態のみを意味しないことである。彼は、チャールズ救出の期待が自分一人にかけているという誇りを持つからである。しかし、マネット医師の尽力は虚しいものとなる。共和国の敵としての容疑、すでに廃止された特権を利用して人民を弾圧したという理由で、ダーニーが死罪を宣告されるからである。

運命の皮肉は、旧体制の専制的な無情の犠牲者マネット医師が自身の娘がかつてのろっていた貴族に嫁ぐとき、迫害者へかけたのろいの中生きていかざるをえないことである。マネット医師がバスティーユの獄中で1767年書いたサン・テヴレモンドの一族を告発する手記が公にされるとき、それは、ダーニーに死を求める令状に承認を与えてしまう。手記の朗読が終わったとき、恐ろしい怒号がわき起こり、聞き取れるものは、ただ血とい

う強烈な渴望の叫びのみとなる。絶望的な状況に直面したマネット医師は、再び屋根裏部屋におけるかつての状態に陥ってしまう。シドニー・カートン (Sydney Carton) によるダーニー救出がなければ、パリはマネット医師にとって暗い過去との関連でのみ思い出される場所のままであろう。マネット医師は、カートンによってかろうじて救われると言ってもいい。次にカートンにとってのパリについて考えてみたい。

3. カートンとパリ

マレーは、「カートンは、ディケンズの作品の中でも無私の究極の例である。無私とは、彼の全ての小説の中の重要な徳である」と述べている (Murray 67)。マレーの言う無私は、カートンが自分と瓜二つのダーニーの身代わりになるとき、完全な姿をとって我々の前に現れる。カートンが無私の究極の姿を示すに到るまで、他者のために自身を犠牲にするという側面がなかったわけではない。なぜならば、彼は、仲間を押しつけて法律家として成功の途上にあるストライヴァー (Stryver) に下働きとして仕えているからだ。カートンのこのような傾向は、成長過程にも見られる。それは、シュルーズベリー (Shrewsbury) の学校時代を思い出し、彼が「他人のための宿題はやっても、自分のだけは減多にしなかった」(83) という言葉にも窺える。

カートンには、このように他者のために自身を犠牲にする傾向がある一方で、自身の存在に関する不安が見られる。カートンがストライヴァーに言う言葉、「僕らあのパリの学生区で、一緒に勉強していたときだって、そりゃフランス語だの、フランス文法だのと、その他あまり役にも立たなかったガラクタ知識を、お互いかじってみたものだね。だが、そんなときでも、いつも君はちゃんと存在を認められていた。ところが、僕の方は——完全にいないも同然だった」(84) は、カートンが自身の存在の意

A Tale of Two Cities

味を求めていることを暗示している。彼は、自身の存在の意味が解らないがゆえに、人生の意味を見つけられない状態にある。そのため、皮肉癖、虚無主義、自己嫌悪に陥り (Stone 358)、自己崩壊に向かい、情けない致命的な程放埒な生き方を余儀なくされる (Reed 261)。

このようなカートンを救うきっかけとなったのがルーシーとの出会いである。スレイターは、「デイヴィッド (David) に対するアグニス (Agnes) のように、ルーシーは、カートンに最も良い自己に値するようになるよう熱心に勧める」と述べている (Slater, *Dickens and Women* 279)。またスレイターは、「アグニスのようにルーシーは、家庭的な幸福を作ったり支えたりする機能を持っている」と指摘している (Slater, *Dickens and Women* 279)。針仕事に象徴されるように、ルーシーは、アグニスのように家庭的幸福と関連づけられる女性であるだけでなく、良い自己を再生させる力を持っている。*David Copperfield* (1850) において、ステアフォース (Steerforth) と彼の友人に誘われ、酒を飲み、劇場で正気を失っているデイヴィッドを見て、アグニスは、ステアフォースを避けるように言う。このときアグニスのことをデイヴィッドは、「善い守り神」(366) と認識し¹¹⁾、アグニスは、ステアフォースのことを「悪い守り神」(367) だと言うので、ディケンズは、アグニスをデイヴィッドを良き方向に導く存在として意図している。一方、*A Tale of Two Cities* において、「飲んだくれ、すさみはてた自暴自棄で、いわば一生を棒に振ってしまった哀れな人間」(143) であったカートンは、「あなたという方は、死灰のようなこの僕に、突如として、生命の火を点じてくださったのです」(144) とルーシーに言うので、ルーシーもまたカートンを良い方向に導く存在であると言っていい。

見落としてはならないことは、カートンの無私へ至る意識の決定的変化がソーホーではなく、パリにおいてなされることである。カートンは、銀行家としての仕事を持ち、人々から尊敬の目で見られていたロリーに彼が

78歳だと聞く。カートンは、ロリーに「もし今夜あなたがですよ、本当に心からあなたの寂しい胸に『ああ、おれは結局、誰一人人間の愛情も、感謝も、尊敬も得ることができなかつた。結局おれは、誰の胸にもなつかしい思い出を残すことができなかつた。思い出を残すような、何一ついいことも、役に立つこともなかつたのだ！』などというようなことをおっしゃるんでしたら、それこそ78年の生涯なんてものは、そのまま78の恐ろしい呪いだったと言ってもいいんじゃないでしょうか？」(295)と言う。カートンの言葉は、ロリーだけでなく、自身に問いかけるような言葉である。

パリで自身の存在意義について考えていたカートンは、父親の墓の前で読み上げられた言葉、すなわち、「イエスのたまいけるは、我は復生なり、生命なり。我を信ずる者は死ぬとも生くべし。すべて生きて我を信ずる者は永遠に死ぬことなし」(298) (John 11:25-26)を思い出す。ギロチンの斧に制圧されているパリで¹²⁾、この言葉を思い出すカートンは、ダーニーが死刑を宣告されるや自身の生きる道を発見する。コンシェルジュリ(Conciergerie)の獄舎で最後の運命を待つダーニーの状態をディケンズは、「それにしても最愛の妻の面影が、ありありとまぶたに浮かぶと、やはり受難に対して平静でいることは容易ではなかつた。生への執着はまだまだ強く、それをゆるめることは極度に困難だった」(329)と伝えている¹³⁾。

一方で、身代わりとなると決めたカートンは、ダーニーに服や靴を変えさせ、死刑囚護送馬車に乗る。ディケンズは、「6台の死刑囚護送馬車、それがこの日聖女ギョテーヌのもとに送られるぶどう酒だったのだ」(353)と描写している。パリは、このように人間の流血おびただしい場所であるが、ディケンズは、もう一つの血の意味を示している。それは、ギロチンにかけられる前カートンが手を握ってやっていた一人のお針娘の感謝の言葉、「今日この場に臨みましても、なお希望と慰めが持てますよう

A Tale of Two Cities

に、十字架の死を背負ってくださいましたイエスさまにも、こんなふうにお祈りを捧げることはできなかつたらうと思いますの。きっとあなたさまは、神さまがわたしにおつかわしくくださったのだと思いますわ」(356)によって明らかとなる。お針娘にとっては、イエス＝キリスト以上に現実感のあるカートンではあるが、カートンが先に「イエスのたまいけるは我は復生なり、生命なり。我を信ずる者は死ぬとも生くべし。すべて生きて我を信ずる者は永遠に死ぬことなし」(298)と言っていることから、ギロチンでカートンが流す血は、キリストの血を連想させる。このように考えると、パリは流血の場所であるだけでなく、再生を期待させる場所でもあると言える。

結び

以上、ディケンズがフランス革命を中心に描き出した作品 *A Tale of Two Cities* において、パリが表しているものについて考えてきた。ディケンズは、まずパリにおいて抑圧された民衆が立ち上がる様子を描き出している。彼は、ドファルジュの酒店の戸口で壊れて流れ出た赤ぶどう酒を革命で流される血と関連づけている。革命における流血は、民衆の飢餓感によって引き起こされる¹⁴⁾。そのような民衆の姿を代表するかのような姿を示しているのがマダム・ドファルジュ (Madame Defarge) である。フーロンが捕まったとき、彼女は、「縄でぐるぐる巻きにされたあの野郎をご覧よ。背中に草の束くくりつけたのは、よかったねえ。はっはっ！こいつはうまい！いっそ食わしてやりゃいいのよ！」(213) と言う。このようなマダム・ドファルジュは、ジェフリー・サーリー (Geoffrey Thurley) が述べているように、「階級決定論の表象」であり、彼女がずっと編み物をしていることは、「抑圧された階級のつもりつもった復讐の記憶の完全な象徴」であると言ってもいい (Thurley 257)。

民衆の怒りが爆発し、多くの血が流されることから、パリは、復讐と流血の場所である¹⁵⁾。一方で、マネット医師にとってパリは、忘れ去りたい過去の記憶と関連づけられる場所である。なぜなら彼は、サン・テヴレモンド侯爵兄弟の秘密を知ったがゆえに、18年間もバスティーユに幽閉されていたからである。ただ、パリでマネット医師は、ルーシーとの再会により再生する。このことから、パリは彼にとって一時的な再生の場所である。マネット医師の不幸は、娘のルーシーが将来民衆の復讐の的となる貴族ダーニーに嫁ぐことにある。ダーニーが死刑を宣告された後、マネット医師は、かつて屋根裏部屋で行っていた靴作りの姿を示す。彼は、穏やかな家庭が失われるという恐怖のため、正気を失ってしまう。このようなマネット医師と一家を救い出すのがシドニーである。

シドニーは、ずっと放埒な生き方をしていたが、ルーシーとの出会いによって自身の存在意義を見出す。彼女との出会いによってカートンの最も悪い自己は死に、最も良い自己は再生する¹⁶⁾。民衆の復讐心に満ちたパリでダーニーに身代わりとなり、キリストのごとくギロチンの露と消えるカートンにより、ディケンズは、復讐心から流される血とは別の血の意味を示している。それは人類のため流されたキリストの血である。パリは、作品において、復讐の場所であると同時に再生と赦しの場所でもある、と言っているだろう。

注

- 1) Charles Dickens, *A Tale of Two Cities* (New York: Oxford UP, 1991), p. 1. この作品からの引用文は、この版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、中野好夫訳『二都物語』(新潮社)を参考にした。
- 2) 1848年に二月革命が行われた。七月王制の制限選挙制に対する中小資本家の不満、金融資本家と結ぶ王の政策に対する社会主義者や共和主義者の不満、国王の保守専制政治への移行に対する不満、東方問題をめぐる外交上の失敗

A Tale of Two Cities

に対する国民の不信などが原因となり、ブルジョア共和派・小市民・労働者が蜂起し、「軍隊と市街戦となり、市庁占領、王宮攻撃という経緯をたどり、ルイ＝フィリップは、イギリスへ亡命した。

3) ヴェルサイユでは、8000人のデモ隊が国王の住む宮殿へ押しかけた。国王16世は、バルコニーへ出て、群集に答えた。民衆の望みは、小ムギの値段を下げてもらいたいということだけであった。ヴェルサイユ総督は、デモ隊の要求する値段にすることを約束した。彼らはその回答に満足して四散した(河野, 樋口 52-53)。

ここで、ヴェルサイユ宮殿について触れておきたい。もともこの宮殿は狩を大変好んでいたフランス王ルイ13世(在位1610~43)の休憩所として1623年から24年にかけて建設された。サン・ジェルマン(Saint Germain)の森で狩に興じた王が夢中になりすぎてサン＝ジェルマン＝アン＝レー(Saint Germain-en-Laye)城館に帰れなくなることも多く、ヴェルサイユ村の農家の納屋に宿をとることもあったからである。この城館を気にいった王は、1631年から34年にかけて段階的に城館をとりこわしながら、赤レンガとクリーム色の切石からなる新たな城館を建設した。これが後世、「小城館」と呼ばれるようになったものである。1643年5月14日、ルイ13世が崩御すると、4歳のルイがルイ14世(在位 1643~1715)として「フランスおよびナヴァールの王」に即位した。後世、「太陽王」(Roi-Soleil)と呼ばれるようになるフランス絶対王政を代表する王である。彼も父王と同じく狩の愛好家であり、ヴェルサイユの地に少年時から親しんだようである。王はヴェルサイユの拡張も手掛けた(中島 143)

フランス革命勃発まで、ヴェルサイユ宮殿にはフランス国王が住み、自分の好みで宮殿を美しく飾った。

4) 7月14日の朝、民衆は、絶対王制の象徴バスティーユ監獄に進撃することにした。バスティーユ監獄で要塞を守っている軍隊は、110人の男性であり、そのうち80人は退役した傷病兵であった。正午を少し過ぎた頃、親しげにデモ隊の代表団を監獄に招くやいなや、バスティーユ監獄の長官ドロネイ侯爵(Marquis de Launay, 1740-89)は、彼の兵士が最初に発砲されないかぎり暴徒を襲撃しないと約束した。しかし、反逆者の一団は、要塞に居残っていた。民衆はいらいらして、わなではないかと疑っていた。市民の2番目のグルー

ブが仲間の安否を心配して要塞の中庭の一つに入ったとき、ドロネイは、襲撃されたと思い、兵士に撃つよう命じた。98人が死に、70人が負傷した。大量殺戮にニュースがすぐにパリじゅうに広がり、この頃から大虐殺を止める手段がなくなった。ラファイエット (Lafayette, 1757-1834) の国民防衛軍のいくつかの派遣隊が大砲を持ってバスティーユ監獄に進撃した。ドロネイは、要塞を民衆に譲り渡した。民衆は、7人の被収容者たちを解放するために要塞に入った。7月14日の夕方までに、旧体制の最も強力な象徴を占領したことが多くのフランスの特権階級の人々に恐怖を与えた (Gray 91-91)。

ドロネイは、惨殺された。彼の首を掲げ、民衆は市中を練り歩いた。この知らせが地方に伝わると、農民はパニックを起こし、領主の館を襲った。農民を落ち着かせるため、8月4日、議会は封建的諸特権の廃止を決定した。このときには、廃止が決定されただけで、具体的な方法は1790年3月15日の法律で定められた。領主の裁判権や狩猟権、教会の10分の1税などは無償で廃止された (西願 26)。

『人間と市民の権利の宣言』(人権宣言) (*Déclaration des Droits de l'Homme et du Citoyen*) は、急遽作成された。主な起草者は、アメリカ革命の功労者の一人、ラファイエットであった。フランス革命の幕開けとなったバスティーユ監獄襲撃からわずか一カ月あまり後の1789年8月26日、フランス国民議会はこれを採択した。

新しい憲法の基盤となり、後の憲法にも影響を与えたこの宣言は、万人の平等と権利の不可侵性を支持し、封建制度と絶対王政を否定した。その哲学的背景は、アメリカとフランスの両革命に携わったイギリスのトマス・ペイン (Thomas Paine, 1737-1809) やフランス人のジャン=ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-78) といった著述家によってもたらされた (ファータド 439)。

5) Thomas Carlyle, *The French Revolution* (Oxford: Oxford UP, 1989), p. 215.

この作品からの引用文は、この版により、引用末尾の括弧にページを示す。

6) アンドルー・サンダーズは、「*A Tale of Two Cities* は、トマス・カーライルのとても靈感を与える散文の影響を受けている」と述べている (Sanders 153)。ピーター・アクロイド (Peter Ackroyd) は、「ディケンズのフランス革命についての知識は、22年前に出たカーライルのすばらしい歴史によって

A Tale of Two Cities

強化された。しかし、それはいつもディケンズを引きつけた主題であった。実際のところ、これに関する彼の意見は変わらなかった。なぜならば、フランスの旧体制そのものが革命を引き起こす状況を作り出したというのが彼の考えであったからだ」と述べている (Ackroyd 907)。ディケンズは、1851年7月にフォースター (Forster) に *The French Revolution* を500回読んだと言っている。マイケル・スレイターは、「*A Tale of Two Cities* の初めの方の状況を説明するため、ディケンズは、自身の書齋にあった1774年から1776年にかけての *The Annual Register* を十分に利用し、旧体制の元でのフランスの状況についての説明を広範囲に読んだ」と説明している (Slater, Charles Dickens 473)。

- 7) スレイターは、「*A Tale of Two Cities* において、我々は、女性の性質に潜在的にある恐ろしい力が勢いよく現れることについてのディケンズの念入りで恐怖を伴う描写を見る」、また、「女性の感情の恐ろしい爆発は、ディケンズが描く旧体制のもたらした悪い結果の表れである」と述べている (Slater, Dickens and Women 355)。1789年10月5日の朝、サン＝タントワヌと中央市場の2ヵ所から、パンを求めるデモ行進が始まった。このデモの隊列の多くは、女性たちによって構成されていた。食糧価格の高騰は、一家の家計を預かる女性たちや市場で商いをする女性たちに特に影響があったからである (林田 36)。1789年10月のベルサイユ行進で政治活動の先頭に立って以来、女性はフランス革命で重要な役割を果たし、サン・キュロットのクラブや民衆協会、特に「両性の友愛協会」などにも積極的に参加していた (安達 149)。
- 8) ジョン・グリーヴス (John Greaves) は、ルーシー・マネットにメアリー・ホガス (Mary Hogarth) の面影を感じ取っている (Greaves 35)。メアリーは、ディケンズの妻キャサリン (Catherine) より4歳下の義理の妹で、美しく生き生きした女性であった。彼女は、1836年ディケンズの家に移ってきたが、1837年5月6日突然亡くなった。
- 9) ヨーロッパにヒマワリが渡来するまで、「太陽の方を向く」と考えられてきた花は、マリゴールド (キンセンカ) であろう。ここで注意を要するのは、英語でマリゴールドと呼ばれる花には全く異なる二つの種類があるということだ。夏から秋にかけて、黄、赤、オレンジなど暖色系の花を咲かせるタゲテス (Tagetes) 族の「マリゴールド」は、アフリカン・マリゴールドとフ

レンチ・マリゴールドで、どちらも原産地はメキシコから中央アメリカにかけてのいわゆるメソアメリカである。花の形や色がヨーロッパに古くからある「マリゴールド」に似ていたために、こう呼ばれるようになったのであろう。前者は高い草丈で大輪の花をつける。16世紀にはスペインへ伝わり、南ヨーロッパや北アフリカに広まった。後者は草丈が低く、枝分かれする。スペインを経てフランス王宮の庭で初めて開花した。これらの「マリゴールド」はヒマワリ同様、16世紀にヨーロッパへもたらされたものである。

これに対して、カレンドゥラ (Calendula) 属のマリゴールドはバルカン半島や西アジアが原産で、ポット・マリゴールドとも呼ばれる。わが国では、キンセンカ (金盞花) の名で知られている。花が黄金色で「盞」(さかずき) の形をしているところからこの名がついた。古代ローマ人はこの花をカレンドゥラと呼んだ。これはラテン語のカレンダエ (Calendae) [ローマ古暦の朔日 (ついたち)] に由来する。温暖な気候では一年の大半を通して開花し、月初めにも決まって咲いているからである。「暦」を意味するカレンダーも語源は同じである。

マリゴールドは、すでに古代ギリシア、ローマ、そしてアラブの世界でも薬用に使われていた。最も一般的には皮膚病の治療に利用された。中世ヨーロッパでは、ときに「貧者のサフラン」と呼ばれ、高価なサフランの代用品とされることが多かった。その黄色がかった橙色の花弁はケーキやプディング、あるいはチーズの色づけに使われた。また、乾燥した花は、市場では樽に入れて販売され、スープやブイヨンの素にされた。花弁はスマイレやジリフラワーなどとともサラダの材料として用いられ、料理に彩りを添えた。葉はハーブティーにしたが、気持ちを和らげる効果もあった。マリゴールドはヘアーリンスとしても利用され、金髪に金の色つやを与えた。実際、北欧ヴァイキングの女性たちは髪染めにマリゴールドを利用したほか、織物の染料としても使用した。

マリゴールドは中世には聖母マリアと結びつき、マリアの花とも呼ばれた。それも道理で、花名マリゴールドは「マリアの黄金」に由来し、教会の祭壇を飾るには最もふさわしい花だった。マリゴールドは中世のマリア崇拜と結びつき、聖母マリアに捧げられた (遠山 159-61)。

10) ドクター・マリゴールドの耳が聴こえない娘は、ボストンのパーキンズ視

A Tale of Two Cities

力障害マサチューセッツ園 (The Perkins Institution and Massachusetts Asylum for the Blind) の耳と目の不自由なローラ・ブリッジマン (Laura Bridgeman) をディケンズが見た経験に基づいていると考えられる。ディケンズは、*American Notes* (1842) 第3章に、ハウ (Howe) 博士による文章を紹介している。ハウ博士は、ローラと初めてあったときのことを次のように書いている。

“At this time, I was so fortunate as to hear of the child, and immediately hastened to Hanover to see her. I found her with a well-formed figure ; a strongly-marked, nervous-sanguine temperament ; a large and beautifully-shaped head; and the whole system in healthy action. The parents were easily induced to consent to her coming to Boston, and on the 4th of October, 1837, they brought her to the Institution.

(*American Notes* 34)

11) Charles Dickens, *David Copperfield* (New York: Oxford UP, 1989), p. 366.

この作品からの引用文は、この版により、引用末尾の括弧にページを示す。

12) ジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-50) は、「*A Tale of Two Cities* を読んだ者なら誰でも忘れられないのは、まず「恐怖政治」である。全巻をギロチンが支配している」と述べている (Orwell 41)。

ところで、フランス革命期のパリの演劇について付記しておきたい。1791年1月13日「劇場の自由に関する法」の第一条では、「全ての市民が、劇場の建設に先んじて現地当局に申請すれば、公共の劇場を立てることができ、またあらゆるジャンルの芝居を上演する権利を有する」と定められていた。しかし、1793年8月2日「演劇の監視を強める政令」の第一条では、「今月(8月)6日から次の9月1日までの間、週3回、パリ市当局によって指名された劇場で、『ブルータス』(*Brutus*) [ヴォルテール (Voltaire) 作], 『ウィリアム・テル』(*Guillaume Tell*) [レミエール (Lemierre) 作], 『カイウス・グラックス』(*Caius Gracchus*) [シェーニエ (Chénier) 作] の悲劇、あるいは革命の輝かしい出来事と自由の擁護者の美德を描く戯曲を命じる。これらの作品のうち一つは、毎週共和国の費用で上演される」と定められる。さ

らに第二条では「いかなる劇場も、公衆の精神を墮落させ、王政の恥すべき盲信を目覚めさせるような作品を上演する場合は閉鎖され、劇場支配人は逮捕され、法によって厳格に罰せられる」と定められる。このことから、自由だった演劇が規制されるようになったことが解る。

- 13) コンシェルジュリーは、14世紀にフィリップ4世の宮殿として創建され、執務の館も設けられていた。ゴシック様式の大広間「衛兵の間」は、中世の王宮の雰囲気をも今に伝えている。尖った屋根をセーヌの川面に映すたたずまいは、ロマンチックな古城と呼ぶにふさわしい。

しかし、革命の嵐が吹き荒れた時代、その建物は牢獄に転用され、<ギロチンの待合室>として、恐怖政治の象徴となった。「コンシェルジュリーは、パリ市中にも世界にも知られていることだが、政治犯の中で最も危険な分子のための、選りぬきの監獄である。この監獄の収容者名簿に名前が記入されたら、確かに死亡証明書をもらったものと観念していい」とステファン・ツヴァイク (Stefan Zweig) は、述べている (ツヴァイク300)。収監され、断頭台行きの護送車に乗せられた囚人は、1793年1月からわずか1年半で、約2600人いた。その中には、フランス王妃マリー・アントワネット (Marie Antoinette, 1755-93)、ルイ (Louis) 15世の愛人デュ・バリー (Du Barry, 1741-93) 夫人、革命家のダントン (Danton, 1759-94) やロベスピエール (Robespierre, 1758-94) の名も含まれている。

「衛兵の間」の奥の一角は「パリ通り」と呼ばれる雑居房となり、貧しい囚人が家畜のように藁の中で寝かされていた。その一方で、高額な金品を提供すれば上層にある独房を与えられ、ベッドで眠ることができた。しかし、アントワネットが最後の約2カ月半を過ごした独房は、一枚の衝立があるだけのじつに質素なものであった (講談社総合編纂局 21)。

- 14) フランス革命の衝動に貢献した思想家としてジャン・ジャック・ルソーを忘れてはならない。彼は、『人間不平等起源論』 (*Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*) (1775) の中で、墮罪の世俗的形式について詳述している。彼は作中、自然状態より遥かに進歩しているものの、国家や私有財産の整備以前にある共同体が営む調和のとれた生活という原初状態は、富裕者によって押しつけられた、貧者を永久に私有財産という高度な搾取制度に拘束する苛烈な社会契約によって、乱脈な終焉を迎えてい

A Tale of Two Cities

ることを指摘している。ルソーはまた『社会契約論』 (*Du Contract Social ou Principes du droit politique*) (1726) において、貧者が財産の蓄積や贅沢や政治的腐敗に新たに制約を課すことを提案している。彼は、キリスト教のエデンと墮罪神話に直接なぞらえて、人間は生まれながらに自由であり、言い換えれば本来無垢であるが、今や至るところで鎖でつながれていることを指摘した (クレイズ 154)。

15) ロジェ・シャルチエ (Roger Chartier) は、フランスにおける非キリスト教化の背景としてプロテスタントの台頭による教会内の分裂だけでなく、18世紀に人口移動があったことを指摘している。限定的にまた一時的であったとしても、人々は田舎を離れ都市に移動し、村を去り仕事を求めた。このような移動によって印刷物が循環するようになり、外部に対して閉ざされていた共同体に新しい考え方がもたらされた。人々は、教区による拘束や聖職者の権威から解放された (Chartier 105)。

16) ジョセフ・ゴールド (Joseph Gold) は、「小説の復活のテーマを理解するため、ジェリー・クランチャー (Jerry Cruncher) に目を向けなければならない。なぜならば、彼はダブルや生と死のテーマと関係のある神秘を解き明かす鍵を持っているからである」と述べている (Gold 257)。クランチャーは、昼はテルソン銀行 (Tellson's Bank) の使い走りをし、夜は死体盗掘人 (a resurrection man) をしている。いわば、二つの自己を持っていると言える。彼は、途中で悔い改め、死体盗掘人をやめる。このことがシドニーの二つの自己を描き出す上で効果的に働いている。

18~19世紀のイギリスでは、解剖学や外科医が解剖に使用するため死体の需要が高かった。ところが、1832年の解剖法の成立まで、合法的な解剖用死体として認められたのは、処刑された殺人犯のものだけであった。そういうわけで、死体の盗掘が横行することになった。死んでから間もない遺体を墓場から持ち去り、医師や解剖学者に売ったのである (ハワース 259)。

恐るべき死体売買もあった。マンチェスターでは、教会堂管理人のほとんどは、読み書きができず、しばしば解剖学者のための墓あばきと関連づけられる疑わしい人たちであった (Powell & Hunwick 300)。マンチェスターには2つの医学校があった。そして、教会堂管理人による死体の売買に関するいくつかの悪名高い事例があった (Powell & Hunwick 304)。

他の場所でも死体売買があった。1828年、ウィリアム・バーク (William Burke, 1792-1829) とウィリアム・ヘア (William Hare) という、二人の 아일랜드人の「死体盗掘人」は逮捕された。本人たちも認めている殺しは、9ヶ月で合計16人の不運な男女に及んだ。哀れな犠牲者の中には、18歳のベテラン売春婦やダフト・ジェイミーという精白の若者が殺人鬼の餌食となった。彼らの唯一の客は、ロバート・ノックス (Robert Knox, 1791-1862) という解剖学の教授であった。金目当てにエディンバラの住人を食べ物にした二人の犯罪は、たちまち夥しい数の出版物を生み出した (オールティック 42-45)。

作品

Dickens, Charles. *A Tale of Two Cities*. New York: Oxford UP, 1991.

参考文献

Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1990.

Carlyle, Thomas. *The French Revolution*. Oxford: Oxford UP, 1989.

Chartier, Roger. *The Cultural Origins of The French Revolution*. Trans. Lydia G. Cochrane. London: Duke UP, 1991.

Cook, Susan. "Season of Light and Darkness: *A Tale of Two Cities* and the Daguerrean Imagination." *Dickens Studies Annual*. Vol. 42. Ed. Stanley Friedman, Edward Guiliano, Anne Humpherys, Natalie Macknight, Michael Timko. New York: AMS P, 2001: 237-60.

Dickens, Charles. *David Copperfield*. New York: Oxford UP, 1989.

Gold, Joseph. *Charles Dickens: Radical Moralizer*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1972.

Gray, Francine Du Plessix. *The Queen's Lover*. New York: Penguin Books, 2013.

Greaves, John. *Dickens at Doughty Street*. London: Elm Tree Books, 1975.

James, Elizabeth. *Charles Dickens*. New York: Oxford UP, 2004.

Monod, Sylvère. *Dickens the Novelist*. Norman: U of Oklahoma P, 1968.

Orwell, George. "Charles Dickens." *George Orwell: Essays*. London: Penguin Books, 2000: 35-78.

A Tale of Two Cities

- Murray, Brian. *Charles Dickens*. New York: The Continuum Publishing Company, 1994.
- Powell, Michael. Hunwick, Christopher. "The Manchester Cathedral sexton's registers." *The Local Historian*. Vol. 39. No. 4. Ed. Alan Crosby. Salisbury: Salisbury Publishing Company, 2009: 300-13.
- Reed, John R. *Dickens and Thackeray: Punishment and Forgiveness*. Athens: Ohio UP, 1995.
- Slater, Michael. *Charles Dickens*. New Haven: Yale UP, 2009.
- Sanders, Andrew. *Charles Dickens*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- Stone, Harry. *The Night Side of Dickens: Cannibalism, Passion, Necessity*. Columbus: Ohio State UP, 1994.
- Thurley, Geoffrey. *The Dickens Myth: Its Genesis and Structure*. London: Routledge & Kegan Paul, 1976.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Harmondsworth: Penguin Books, 1970.
- 安達みち代, 『近代フェミニズムの誕生—メアリー・ウルストンクラフト』, 京都, 世界思想社, 2002.
- オールティック, R. D., 『ヴィクトリア朝の緋色の研究』, 村田靖子 (訳), 国書刊行会, 1988.
- 講談社総合編纂局, 『週刊ユネスコ世界遺産 第4号 パリのセーヌ河岸1』, 講談社, 2004.
- 河野健二, 樋口謹一, 『フランス革命』, 河出書房新社, 1997.
- クレイズ, グレゴリー, 『ユートピアの歴史』, 巽孝之 (監訳), 小畑拓也 (訳), 東洋書林, 2013.
- スミス, P・D, 『都市の誕生—古代から現代までの世界の都市文化を読む』, 中島由華 (訳), 河出書房新社, 2013.
- 遠山茂樹, 『歴史の中の植物 花と樹木のヨーロッパ史』, 八坂書房, 2019.
- 西願広望, 「人権宣言」, 『よくわかるフランス近現代史』, 剣持久木 (編著), 京都, ミネルヴァ書房, 2018: 26.
- ソブール, アルベール, 「現代の入口 新しい社会」, 『フランス文化史』, ジャック・ル・ゴフ, ピエール・ジャンナン, アルベール・ソブール, クロード・

- メトラ (著), 桐村泰次 (訳), 論創社, 2012.
- ツヴァイク, ステファン, 『マリー・アントワネット』, 藤本淳雄, 森川俊夫 (訳), みすず書房, 1998.
- 中島智章, 「ヴェルサイユ宮殿の建築・美術とブルボン王朝の記憶の継承」, 『装飾と建築—フォンテーヌブローからルーヴシエンヌへ』, ありな書房, 2013.
- バショア, ウィル, 『マリー・アントワネットの髪結い 素顔の王妃を見た男』, 阿部寿美代 (訳), 原書房, 2017.
- 林田伸一, 「フランス革命と女性」, 『ヨーロッパと女性』, 成城大学文芸学部 ヨーロッパ文化学科 (編), 成城大学文芸学部, 2017: 35-60.
- ハウス, グレニス, リーマン, オリヴァー, 『死を考える事典』, 荒木正純 (監訳), 幸野良夫, 武井摩利 (訳), 東洋書林, 2007.
- ファータド, ピーター (編), 『世界の歴史を変えた日 1001』, 荒井理子, 中村安子, 真田由美子, 藤村奈緒美 (訳), ゆまに書房, 2013.
- フライ, ノースロップ, 『ダブル・ヴィジョン 宗教における言語と意味』, 江田孝臣 (訳), 新教出版社, 2012.
- リグビー, エドワード, 『フランス革命を旅したイギリス人—リグビー博士の書簡より』 川分圭子 (訳), 横浜, 春風社, 2009.

A Tale of Two Cities:
Paris and Its Epiphany

YOSHIDA Kazuho

A Tale of Two Cities (1859) is Dickens's 12th novel, serialized unillustrated in weekly parts in *All the Year Round* (April 30 to November 26, 1859). It was simultaneously issued in eighth monthly numbers by Chapman & Hall, illustrated by Hablot Knight Browne (1815–82). It was also published in one volume in 1859. Dickens's second historical novel is largely based on *French Revolution* (1837) by Thomas Carlyle (1801–66); one of Dickens's favorite books was Carlyle's *French Revolution*, a history he had read many times. Carlyle's idiosyncratic and impressionistic work broke from the tradition of rationalist historiography and stressed the irrational aspects of the French Revolution, what he called "daemoniac" element.

A Tale of Two Cities was intended to make that "terrible time" more "popular and picturesque". Departing from his accustomed manner to concentrate on the incidents and myth in his story rather than on the characters, Dickens attempted to reconcile his historical theme with the personal story of Sydney Carton, whose sacrifice challenges historical inevitability. Carton falls hopelessly in love with Lucie Manette and promises to offer any sacrifice for her. His opportunity comes when Darney, now her husband, is sentenced to execution. He uses his likeness to Darney to change places with him in prison and to take his place at the guillotine.

It is intentionally the tale of two cities, Paris and London, and above all the tale of a cruel whirlwind that arose and swept through one of them—Paris—in the shape of the Terror. In Chapter 5 of Book 1, a mob of the poor has gathered in the cobblestone street in front of a wineshop in Paris to sop up

wine from a broken cask. During the desperate revelry, one of the celebrants writes the word *Blood* in wine on the wall. It foretells the bloodshed in Paris. After the storming of the Bastille on July 4, Foullon (1715-89), a French politician and a Controller-General of Finances under Louis XVI (1754-93), fled from Paris the house of his friend Antoine de Sartine (1729-1801), but Foullon was captured by the peasants on July 22. Foullon's killing is mentioned in *A Tale of Two Cities*. Paris is the place of vengeance and bloodshed, because people flies into a rage and it develops into a bloody affair.

Manette family is a French doctor's family who becomes entangled in the French Revolution through their connections with aristocratic St. Evrémondés and the revolutionary Defarges. Doctor Alexander who had known the secret of St. Evrémondés and was thrown into the Bastille, is released from prison and "recalled to life," but he temporarily reverts to his prison occupation as a shoemaker on learning that Darney, the husband of Lucie, is really the Marquis St. Evrémondés, nephew of the Marquis who had him imprisoned. Sydney Carton who has felt languid in his life, comes to life again after he met Lucie and helps Darney out of the guillotine. Carton dies on the guillotine as Jesus Christ died for human beings. We may say that Paris is the place of not only imprisonment and vengeance but also rebirth and forgiveness.